白鷗大学教育学部論集
2011，5（1），211－232

研究ノート・資料

生誕200周年　F. ショパンに捧ぐ

～ ショパン作品解釈への４つのアプローチ ～

松　本　由美子§

2010年は、ピアノの詩人と呼ばれたショパンの生誕200周年にあたり、また、ワルシャワでショパン国際ピアノコンクールが開催される年でもある。こうした背景から、ショパンについて目や耳に触れることが多くなっているが、ショパン作品に接することが、ショパンの魅力を再認識するのみならず、自身と音楽、芸術、ひいては社会について考える機会となったらすばらしいことである。このような思いから、ショパンの生涯と作品への理解を深めるための４つの視点を提示する。

１．故国ポーランドへの郷愁

⑴ 分割されるポーランド

ショパンは、ポーランドが分割され、世界地図から消えた時代に生きた。20歳になるまでワルシャワの幸福な家庭で生活していたが、1830年の秋に祖国を離れ、二度とポーランドに帰る事はできなかった。亡命後もポーランドを愛し続け、故郷を想いながら1849年の10月17日にパリで亡くなった。このような社会背景が、ピアノの詩人と呼ばれるショパンの作品のすべてに影響を与えている。

ショパンの祖国ポーランドは、農作物が豊かに実り、鉱物も豊富にとれ

§白鷗大学教育学部

る大変豊かな国である。北のバルト海が産地の質の良い琥珀は、グダンスクからワルシャワを抜ける琥珀の道を通ってヨーロッパ諸国へと運ばれていた。南のヴィエリチカには世界有数の岩塩採掘場があり、そこで採れた塩は古くからポーランドに富をもたらしてきた。このように豊かな資源の国であったため、いつも周辺諸国からの脅威にさらされていた。

ショパンが生まれる少し前になるが、1772年に、ロシアのエカテリーナ２世は、オーストリアのヨーゼフ２世とプロイセンのフリードリヒ２世との交渉で、第１次ポーランド分割を行った。この分割によって、ポーランドは領土の30％、人口の35％を失っていた。1793年には、ロシア、プロイセンによる第２次分割が行われ、ロシアは白ロシアとウクライナの25万平方キロメートルを、プロイセンはグダンスクをふくむ５万８千平方キロメートルを新たに獲得し、ポーランドは20万平方キロメートルで人口約４百万人になってしまった。第２次分割後、愛国者タデウシュ・コシチューシコは1794年にクラコフで蜂起を宣言する。ショパンの父ミコワイ・ショパンもこの戦いにポーランド人として参戦した。しかし戦いの末、蜂起はロシアに鎮圧されてしまい、1795年には、ロシア、プロイセン、オーストリアにより第３次分割が行われることになる。この第３次分割により、現在のワルシャワと、ショパンの生地ジェラゾヴァ・ヴォラ村はプロイセン領土となり、ポーランドは、地図上から消えてしまった。その後、旧ポーランドは、1807年にナポレオン戦争で建国されたワルシャワ公国の領土となり、フランスと強い連合関係で結ばれる。

ショパンは、この３年後、1810年にジェラゾヴァ・ヴォラで生まれた。

ナポレオンの敗退後、1814年の９月、その後のヨーロッパをどうするのかを決めるウィーン会議が始まった。その時、旧ポーランドは、あらためてロシア、プロイセン、オーストリアの３国に分割されることになった。この実質４回目の分割で、ワルシャワ公国の大半を獲得したロシアが旧ポーランドを主として統治することになった。その後もポーランドは、1830年のワルシャワ蜂起など幾度も独立のための蜂起を繰り返すが、失敗し続け、

1918年、第１次世界大戦の後にようやく独立することになる。

⑵ 幼少のころのショパン

ショパンが生まれておよそ６ヶ月の頃、一家はワルシャワへ引っ越した。父のミコワイは、サスキ宮殿の中にあるワルシャワの高等学校に、フランス語の教師として迎えられ、ショパン一家は、宮殿内に住む事になる。

幼かった頃のショパンは、感受性が強く、ピアノの音を聴くとすぐに泣き出してしまったようだが、やがて母親の弾くピアノにじっと耳を傾けながら、空想の世界に浸るようになり、自分でも即興演奏をして楽しむ様になっていく。最初にショパンにピアノの手ほどきをしたのは、母親のユスティナと姉のルドヴィカだった。ショパンが４歳のころである。６歳から、ショパンは、ヴォイチェフ・ジィヴニィというヴァイオリニストに師事し、そこでJ. SバッハやW. A. モーツァルトなどの古典派の音楽を学ぶ。７歳の頃に作曲・出版されたと言われている２つのポロネーズがある。「ポロネーズト短調」は、現存する楽譜の中では最初の作品であるが、もう１つの「ポロネーズ変ロ長調」は紛失してしまった。この頃作曲された舞曲、行進曲や変奏曲などもすべて紛失している。1818年、８歳の時にラジヴィーウ宮殿で初めてコンサートを行い、“モーツァルトの再来”との評判が瞬く間に広まり、貴族が先を競って自宅に招くようになった。

ショパンは、ワルシャワに引っ越した後も度々ジェラゾヴァ・ヴォラに遊びに来ていた。それは、領主のフレデリク・スカルベクがショパンの洗礼の父であったこと、ワルシャワから比較的近かったことなどによる。ショパンは、ウトラタ川沿いにある小さな邸宅やそこに住む人々と会うために、また懐かしい風景を見に、喜んで帰ってきたようである。近郊のロフ教会にも出かけ、儀式や収穫祭にも参列した。教会で寄進の際におこなわれる祭りでは、必ずといっていいほどマゾフシェ地方に伝わる音楽が奏でられた。このような音楽を聴き体験することが、将来のショパンの作品に影響を与えることになる。

⑶ 青年期のショパン

その後も音楽の勉強を続け、1822年、12歳のころには、ポーランド音楽界の最高権威であるワルシャワ音楽院長ユゼフ・エルスネルに師事している。1823年になると、ショパンは父の勤めているワルシャワの高等学校に入り、一般の生徒と同じ教育を受ける。そこで、生涯の友となるユリアン・フォンタナや、ヤン・マトゥシンスキと出会った。ショパン15歳の時、ポーランド国王も兼務したロシア皇帝アレクサンドル１世の前で演奏し、皇帝から褒章としてダイアモンド入りの指輪をもらった。この年、「ロンドハ短調Op.1」が作曲されている。1826年に高等学校を卒業し、同年９月に、エルスネルが院長を勤めるワルシャワ音楽院に入学した。

ショパンが17歳の時、妹のエミリアが、結核が原因で死去する。

1828年、18歳のショパンは、父親の友人と一緒に、初めて外国旅行をした。２週間ほどベルリンに滞在して、その間に、ヘンデルのオラトリオや、ウェーバー、チマローザといった人達の作曲したオペラを観て、外国の音楽に接した。また、19歳のころ、ワルシャワを訪れていたヴァイオリニストのパガニーニの演奏会を聴いて、大変な衝撃を受けたようである。

このころ初恋をしたとされている。ワルシャワ音楽院の声楽科の学生、コンスタンツィア・グワドコフスカに想いを寄せるが、片思いだった。

1829年、ワルシャワ音楽院を卒業した。友人達とオーストリアのウィーンへ旅行に行き、そこで2度演奏会を行い、いずれも大成功だった。この後、チェコのプラハとドイツのドレスデンを経由して、ポーランドに帰国した。また、1830年にワルシャワで公開コンサートを行い、大成功をおさめた。このころから、国外へ出て活動することを決心し、準備をはじめた。同年11月に再びウィーンに向けて出発する。この後、ショパンは二度と祖国ポーランドの土を踏むことはなかった。

⑷ 祖国を離れるショパン

ショパンは、1830年の秋、旅の途中で親友のティトゥスと落ち合い、

ウィーンに向かい、11月22日に到着する。しかし、ほどなく祖国でのワルシャワ蜂起の知らせを聞くことになる。そして、親友ティトゥスは、革命軍に参加しポーランドのために戦う決意をして、祖国に帰る。この時、ショパンは、「一緒にポーランドに帰って、自分も革命軍とともに戦う。」とティトゥスに話していたが、これに対してティトゥスは「音楽家はその才能を活かして、音楽をとおして祖国のために働くべきだ。」と説得する。ショパンは、泣く泣くウィーンに留まることになった。

当時、ワルシャワ蜂起の知らせを受けて、ポーランドを分割、支配している側のオーストリアの人々は、自国内にいるポーランド人に対して冷遇し、感情的にも冷たく接するようになった。このころのショパンは、不安と孤独の極みにあり、経済的にも精神的にも非常に大変な時期にあったと言える。このころ作曲されたのが、「スケルツォ第1番ロ短調 Op.20」である。やがて、望んでいたような音楽活動もままならなくなってきたため、翌1831年７月にウィーンを離れる決心をし、ドイツのシュトゥットゥガルトを経由して９月にパリに到着する。「練習曲ハ短調 Op.10-12 革命」は、この頃作られた。ショパンの中期の作品の特徴である劇的でダイナミックな作風は、この頃の経験が大きいように思える。

パリに着いたショパンは、パリで多くの音楽家達と出会い、交友関係を持つことになり、後に行われたプレイエル・ホールでのデビューリサイタルをきっかけに音楽活動を軌道に乗せていく。

パリ滞在中に、両親と会う機会は得られましたが、政情が不安定で音楽活動が制限され一部では地下活動とならざるをえなかった祖国ポーランドには、帰ることは出来なかった。この後、国の外から音楽活動を通じて、祖国を励まし続けることになった。

2．愛に生きたショパン

⑴ 初恋の人　コンスタンツィア・グワドコフスカ

1826年、ショパンは高等学校を優秀な成績で卒業し、ワルシャワ音楽院に入学した。そこで、同じ学校で声楽科の学生コンスタンツィア・グワドコフスカの美しさに一目惚れしてしまう。きっかけは、音楽院の演奏会だった。彼女の美しいソプラノに心を惹かれたショパンは、友人のティトゥス・ヴォイチェホフスキだけに恋の悩みを打ち明けている。その文面には、「毎晩彼女の夢を見ている。彼女の思い出に、僕はピアノ協奏曲のアダージョを書いた。」とある。このアダージョが、有名な「ピアノ協奏曲第２番ヘ短調 Op.21」の第２楽章である。切ない恋であったと思われるが、だからこそ、この想いを創作エネルギーに変えていったと考えられる。

グワドコフスカは、ショパンがワルシャワを離れる事を決心して行われた告別演奏会に出演した。ショパンの想いを受けて、ロッシーニの「湖上の美人」を歌っている。ショパンは、二度と会えないかもしれない彼女に、旅立ちのはなむけに詩を書いてもらった。ショパンの苦しい心情を感じさせるが、初恋は、このような形で終わってしまった。この後、1830年に、ショパンはワルシャワを発ち、ウィーンに亡命する。その後、ポーランドで革命が起きたことを契機に、パリへと移住した。

⑵ “わが悲しみ”　マリア・ヴォジンスカ

次に恋をするのが、マリア・ヴォジンスカである。彼女は，ショパンのピアノの弟子で、初め、ショパンはどちらかというと妹のように思っていたようである。しかし、1830年に起きたワルシャワ動乱の際に、富裕な貴族であったヴォジンスキ一家は、国外へと逃れていってしまう。

その後、ショパンと再会するのは、５年後の1835年になってからであった。ワルシャワのショパンの家で寄宿生として一緒に生活していたマリアの兄が、ドレスデンの保養地にショパンを招待したのだ。ドレスデンを訪

れたショパンは、そこで美しく成長した16歳のマリアと再会し、たちまち恋におちてしまう。マリアは、あらゆる才能の持ち主と言えた。美しい声で歌い、ピアノも上手で、さらには文学や美術にもたけていたのである。そのような彼女に夢中になったショパンは、10日間ドレスデンに滞在し、別れ際にその想いを曲に託してマリアに渡している。それが有名な「ワルツ変イ長調 Op.69-1 告別」である。

さて、ショパンはパリに帰る途中、ライプツィヒでメンデルスゾーンやシューマンに会っている。その後、ハイデルベルグで喀血し、パリに着いたショパンは重体だとの噂が広まる。

ショパンは、翌年の夏、つのる想いを胸に、チェコのマリエンバードでマリア・ヴォジンスカと再会する。このとき、ショパンは思いきってプロポーズをした。マリアは、ショパンの気持ちを受け入れ、マリアの母親も一度は了承した。しかし、ショパンがパリに帰った後、マリアの母親から手紙がたびたび届くようになり、手紙には、「健康に気をつける事、マリアと婚約した事を他の誰にも語ってはいけない。」等と世間体を気にするかのようなことが、しばしば書かれていた。そのうち、マリアからの手紙も形式的な素っ気ない文面になり、1837年７月に、マリアからの最後の手紙が届き、婚約は破棄されてしまった。

ショパンは、後にマリアからの手紙を束にして、“わが悲しみ”と書き、想いを封印した。音楽家として成功したショパンであったが、マリアとの間には、ショパンの健康状態は表面上の理由づけであり、実際には貴族の家柄という大きな壁が立ちはだかっていたようだ。このことは、ショパンにとってつらく悲しい経験であったが、いつしかショパンを成長させるものとなった。マリアの方は、その後２度、結婚している。後年、彼女はショパンから贈られたワルツを「別れのワルツ」とよんで大事にしていた。

⑶ 男装の女流作家　ジョルジュ・サンド

有名なジョルジュ・サンドとは、1836年の秋頃、友人のフランツ・リス

トとその愛人ダグー伯爵夫人のパリのサロンで出会った。サンドは、ショパンと出会う以前から、数多くの男性とのスキャンダルに満ちた恋愛関係で、有名な存在だった。その相手には、作家のメリメ、詩人のミュッセといった才能豊かな芸術家もいた。ショパンはサンドに初めて会った時、男装したジョルジュ・サンドの印象について、友人に「なんて感じの悪い女だろう。本当にあんな風で女性なのだろうか。」と語っている。

ジョルジュ・サンドは、本名をオーロール・デュバンといい、当時は大変な人気作家だった。ジョルジュ･サンドという名は、ペンネームである。サンドが男装をしたのは、男女が不平等である当時の社会のあり方に対して不満を持っていたからだった。社会への反発心から好んで男装して葉巻を吸うなど、社交界では風変わりな存在だった。サンドは、1804年生まれで、ショパンよりも年上である。18歳で、カジミール・デュパン男爵と結婚していたが。教養のない夫の高圧的な態度にいや気がさし、二人の子どもを連れて別居してしまった。その後、少女時代からの夢であった小説家になり、本格的に文学活動を始めていた。サンドは、当時の女性の中では教養のある部類であり、特に芸術に対して深い理解があった。芸術への理解に加えて、サンドの男性っぽい雰囲気の中に潜む、女性らしい包容力と懸命に子育てをする姿の対比が、奇妙な魅力となっていた。

一方のショパンは、マリアとの婚約が破棄され孤独な時期であった。そこにサンドが現れ、ショパンは大変心を動かされ、二人は急接近していく。１年後の1837年の秋頃には、二人の仲が社交界の噂になっていたが、それは恋愛というよりも、母親と子どものような関係だった。

1838年の秋、ショパンは、サンドの発案でサンドと二人の子どもを連れて、スペイン領のマヨルカ島へ旅行に出かけている。到着後、気候は雨期に入り、その湿気と寒さは弱っていたショパンの体を蝕んでいった。当時のマヨルカ島の人々は病気に理解がなく、ショパンが結核だと知ると怖れて冷たく接した。結局、島での滞在先は僧院に落ち着き、サンドの献身的な看病と努力によって、ショパンの作曲活動は続けられた。旅行としては

散々なものであったため、翌年の２月にはマヨルカ島を出発する。

途中、マルセイユで休養を取りながら、パリの南およそ300キロのノアンにあるサンドの館に到着した。ノアンは、ショパンの生まれ故郷のジェラゾヴァ・ヴォラに似た緑豊かな田園風景が広がっていた。ノアンでショパンの体調は次第に回復し、プレイエルのピアノで美しいメロディーを奏でていたそうである。ショパンは、以後1846年まで、毎年夏をノアンで過ごし、秋から春にかけてはパリに戻るという生活をした。そこで作曲されたのが、「ノクターンOp.48」「ノクターンOp.55」「バラード第２番ヘ長調 Op.38」「バラード第３番変イ長調 Op.47」「バラード第４番ヘ短調 Op.52」「ピアノソナタ第２番変ロ短調 Op.35」「ピアノソナタ第３番ロ短調 Op.58」などである。

ジョルジュ・サンドは、強い男性から保護されるより、自分が守ってあげたいというタイプの女性だった。サンドは、ショパンのことを「可愛い坊や」と呼び、母親的な愛情で、ショパンの才能と旺盛な作曲活動を支えた。また、サンドはショパンの身体を気遣い、夜８時にはショパンを寝かしつけ、その後の時間に執筆活動をした。

しかし、一見充実していたかのような恋に、やがて破局が訪れる。原因は、サンドと２人の子ども、兄モーリスと妹ソランジュをめぐっての家庭内トラブルに巻き込まれたことのようだ。２人の間にこれまでのような感情が行き交わなくなり、ショパンはとても心を痛め、一方、サンドは次第にショパンを憎むようになる。結局９年間に及ぶ恋愛に終止符を打つ事になるが、サンドからの“さよなら”の手紙の後、二人は２度と会うことはなかった。サンドと別れた後、ショパンはサンドの黒髪を一房、自分の手帳に挟み、大事にしていたようだが、サンドはショパンの葬儀にも現れなかった。ショパンの死後、サンドは自分のところに贈られてきた数々の思い出の品を全て燃やしてしまうなど、大変あっさりとした振る舞いだった。

⑷ 英国の女パトロン　ジェーン・スターリング

ジェーン・スターリングは、スコットランド出身のショパンの弟子であった。実家は広大な領地の領主で、富豪の娘である。ジェーンはショパンより６歳年上で、ショパンに恋心を抱いていた。ショパンがジョルジュ・サンドと決別した後、ショパンに接近しパトロンとなる。

1848年２月に起きた革命の後、パリにいた貴族達は動乱を避けてパリから去っていった。そのため、ショパンは収入源がなくなり、生活はしだいに心細いものとなっていく。その頃、ジェーン・スターリングの勧めで、イギリス旅行へ行くことを決心する。ショパンは過密スケジュールの中、ロンドンで大きなコンサートを行った。しかし、イギリス中を、コンサートをするために目まぐるしく移動したことは、ショパンの弱っている身体に相当なダメージを与えてしまう。

ショパンは、ジェーンとその姉妹達の行き過ぎた親切に対してうんざりし、苦情を述べていたようだ。ジェーンの想いは、片思いであった。

さて、ジェーンはショパンの死の床に付き添い、亡くなった後、ショパンの思い出の品々を買い取り、家族に送った。現在パリにある、ペール・ラシェーズ墓地のショパンの墓石は、ジェーンが特注したものである。

ショパンとジェーンは師弟関係以上ではなかったようだが、ショパン自身が、自分の出生の秘密を知っているのは、「母親の他は弟子のジェーンともう一人しかいない」と言っていたので、その関係には謎が多い。

⑸ 同郷の理解者　デルフィナ・ポトツカ

デルフィナ・ポトツカ伯爵夫人は、ショパンの危篤の知らせを聞き、駆けつけ、ショパンの求めに応じて枕元で歌をうたっている。彼女の歌を聞いたショパンは、「美しい」と何度も言って涙を流したそうである。

ショパンより３つ年上のデルフィナは、同じポーランド出身であった。小さい頃から音楽や美術に才能を現し、また大変美しいと評判でまさに才色兼備の女性であった。デルフィナは、18歳でミエチスワフ・ポトツキ伯

爵と結婚した。しかし間もなく、伯爵の冷たく残酷な性格にあいそをつかし、夫婦生活は破綻してしまう。以後、デルフィナはヨーロッパ各地を歩き、出会った芸術家達に多くのインスピレーションを与えるようになる。

ショパンとの最初の出会いは、ショパンがワルシャワからウィーンに亡命した時､1830年頃である。さらに 1 年後､ショパンはパリで再びデルフィナに会う。その頃、彼女は社交界の花形であった。一説によれば、ショパンが社交界にデビューするきっかけとなったロスチャイルド男爵家との出会いを仲介したのが、デルフィナだとのことである。以後、デルフィナとの交流は、ショパンが亡くなるまで続く。

これが、恋愛関係だったかどうかは、なぞである。しかし、デルフィナの母親のサロンでの出来事であるが､ショパンが即興で演奏していた時に、デルフィナが「私の肖像を音で描くとどう？」という注文をしたそうだ。その際、ショパンはデルフィナの肩から無言でショールを取ると、ふわりとピアノの鍵盤の上に置いてピアノを弾き出した。というエピソードがある。単なる知人以上の関係を示唆する出来事なのかもしれない。

彼女には、ショパンの「ワルツ変ニ長調 Op.64-1 子犬」「ピアノ協奏曲第 2 番ヘ短調 Op.21」という名曲が献呈されている。ショパンとデルフィナは、恋人同士というよりは、互いを尊重し合っていた関係だったのではないかと考える。音楽家同志であり、同じポーランド出身者でしか理解できないこともあったのではないか。男女間を越えた強い結びつきのような間柄だったのではなかろうか。

3．ピアノ表現の開拓者

⑴ ピアノの発達

ピアノ曲の普及と､曲を奏でる楽器“ピアノ”の発達は､切っても切れない関係がある。ピアノは、鍵盤装置のハンマーが弦を打ちつけることによって音が出る仕組みになっている。このハンマーアクションと呼ばれる打弦

機構の基礎を考案したのは、イタリア、フィレンツェのクリストフォリで、1709年頃、ピアノ・エ・フォルテと名付けて実用可能にした。

これ以前は、クラヴィコードとハープシコードという２つの楽器が、標準的な鍵盤楽器として1700年まで長期に使用されてきた。この２つの楽器は、バロック時代の代表的な楽器と言える。クラヴィコードは、鍵盤を打鍵すると、キーの端のタンジェントという金属の刃があがり、弦を突き上げて音を出す。この楽器は、音を出している最中に演奏者が鍵盤の押す力を加減して、音をふるわせ装飾することが出来た。クラヴィコードは、小型で大変音が小さく、音の強弱に関して言えば、繊細で表情に富む変化が可能な楽器で、主にドイツで好まれていた。

ハープシコード（ドイツ、イギリス）は、クラヴィコードと平行して発達した楽器である。国によってチェンバロ／クラヴィチェンバロ（イタリア）、クラヴサン（フランス）と呼び方が変わる。この楽器は、鍵盤を打鍵すると、ジャックという細長い木が“てこ”によってあがる。このとき、ジャックの先につけられたツメのような小突起が、弦を引っ掻いて音を出す。標準的なハープシコード（５～６オクターヴ）は、２段鍵盤とペダルと数個の音栓が付いており、鍵盤の色の黒鍵と白鍵が現代のピアノとは、逆になっている。ハープシコードは、クラヴィコードの音よりは強い音が出せたが、クラヴィコードのような強弱の表情に富む変化は表すことができなかった。また、繊細で気品のある音色であるが、音量はピアノに比べると大変小さく、音の伸びも豊かではない楽器なので、長い音を持続させる為に様々なトリルが考えられた。

初期のピアノは、バッハはあまり好まなかったが、後にジルバーマンがバッハに指摘された部分を改良したピアノを製作したところ、バッハはこれを用いてフリードリヒ大王の前でピアノを演奏している。さらに、シュタインが1777年に５オクターヴのピアノを製作し、それを古典時代の作曲家モーツァルトが絶賛し推薦したことから、ピアノが優れた楽器として普及していく。その後、ハープシコード等の楽器と入れ替わり、古典派の中

期ぐらいから、ピアノのための作品が多く作られていくようになった。

その後、ピアノの音楽表現を充実させるために、音域、特に低音域への拡大が図られた。これは、弦の長さと張力の関係で、構造上、楽器にとって大きな負担となるが、19世紀に入り、金属フレームがしだいに使われるようになり、構造と表現力において様々な改良がほどこされ、19世紀の後半には、ほぼ今日の楽器ピアノが完成された。

1821年に、パリのエラール社は、ピアノの打弦機構を改良して、同音の反復を可能にする装置を作った。この装置によって高速の連打が可能になり、今日、私達が使用しているピアノの奏法におけるメカニカルな面が確立した。1823年パリの万国博覧会で、エラール社のピアノが展示された。エラール社のピアノは、派手さと大きな音が特徴だった。ショパンと同時代のピアニストのリストが、好んで使用していたことで知られる。

パリには、他にもいくつかピアノの工房があったが、中でもプレイエル社は、ショパンのピアノを作ったことで有名である。プレイエルのピアノの特徴は、シンギング・トーンと呼ばれる、明るい声の様にささやき、歌うように響く音にある。選び抜かれた素材と響板が使用され、ヴァイオリンの名器として名高いストラディヴァリウスの響板と同じイタリア産の木材で造られており、心地よい優雅な響きと上品な音色を醸し出している。

ショパンはプレイエルのピアノを気に入り、パリでの公式演奏会は全てプレイエル・サロンで行っている。また、マヨルカ島での滞在先にプレイエルのピアノを手配し、ノアンのジョルジュ・サンドの館でもプレイエルのピアノを使用していた。しかし、ショパンは体調が優れない時はエラールのピアノを使用し、体調の良い時はプレイエルのピアノを使用するなど使い分けていたようだ。理由は、エラールのピアノは同音反復等が容易で軽やかなタッチでしかも音量も大きな音が出しやすかったのに対し、プレイエルのピアノは同音反復がしづらく、音量もエラールほどには大きな音が出せなかったからである。

⑵ ピアノ曲の発展

ピアノは、ロマン期の作品とともに、市民層へと広く普及していった。19世紀になると楽器としてのピアノの発達とともに、ピアノを対象とした器楽曲が数多く作曲され世に輩出された。

そのころ、社会経済的にはインフラである鉄道網が整備され産業化が進む一方で、大衆社会の出現と貧困の拡大が指摘される時代において、音楽・芸術は、極めて特異な成長を遂げていく。教養を持ち始めた市民の志向に応えるために、ピアノ等の楽器が普及するとともに、演奏するために多くの楽譜が出版され、さらに演奏会用のサロン、大ホール、教会、オペラ劇場等が数多く建設された。

当時、ピアノは演奏者が一人であることが、ロマン派が追求した個人的な感情表現として大変好まれた。ロマン派のピアノ作品における最大の特色は、様々なキャラクター・ピース（性格的小品）が多く作曲されたことである。内容的には、その多くは３部形式で書かれ豊かな感情表現を盛り込み、あまり形式にとらわれない自由な発想で作曲されていた。

キャラクター・ピースとは、即興曲、ノクターン、バガテル等の名称がつけられている作品、または標題的なタイトルを持つ作品で、牧歌、蝶々、間奏曲、無言歌等の単一曲や数曲をまとめて一曲とした作品を意味していた。標題的なタイトルをつけた作品は、広く文学的な要素の濃いものや幻想的、想像上のものも含まれ、作品を知る手がかりやヒントとなって、当時の人々に受け入れられていった。

このような時代にあって、ショパンは19世紀ロマン派音楽家の中では特異な存在であった。ショパンはマズルカ、ポロネーズのような民族舞曲を数多く作曲したが国民学派には属さず、あくまで形式にこだわらない即興的な作品を書く作曲家の系列に属するからである。加えて、他の作曲家との本質的な違いは、標題的なタイトルのある作品を生前に１曲も発表しなかったことにある。「ワルツ第１番変ホ長調 Op.18　華麗なる大円舞曲」「練習曲ホ長調 Op.10-3　別れの曲」「練習曲変イ長調 Op.25-1　エオリアンハー

プ」「ポロネーズ変イ長調 Op.53 英雄」「即興曲嬰ハ短調遺作（幻想即興曲）」等はショパン自身が名付けたのではなく、出版社や友人フォンタナが付けたものである。出版社等は、当時の流行に合わせていたと考えられる。

ショパンは、標題的なタイトルを付ける事を好まなかったという点で、特異かつ重要な作曲家であった。晩年、ショパンは「メソッドのメソッド」という音楽入門の本を書くことを考えていた。この本は未完成に終わったが、原稿の一節に“音による思想の表現”とあり、「音楽とは音を通じて思想を表現することであり、これらの音によって感情を表示することである」と書かれている。天才ショパンは、音楽により思想を伝えられる、聞き手は作曲家の想いを受け止めることができる、と考えていた。そのため、タイトルが、聞き手に先入観を与えることを避けたかったのである。

⑶ 民族舞曲との融合

ポーランド、ショパンと聞いて、音楽関係者なら、まずマズルカを思い浮かべる。マズルカとは、ポーランドの伝統的な民族舞曲のことで、儀式をはじめとして様々な場面で演じられ、古くからポーランドの人々の心と密接に関わりあってきた。マズルカは、ショパンが生涯にわたり最も多く作曲し、死の真際までずっと書き続けた曲である。

ポーランドには、地方ごとにそれぞれの歴史や時代の中で豊かに発展してきた多様な踊りがあったが、マズルカとは、それらの中で、主としてマズール、クーヤヴィアク、オベーレクを総称した概念である。ポーランドでは、我々がマズルカと呼ぶ楽曲をマズルカとは呼んでおらず、もっぱらマズールもしくはマズーレクと称しているが、ここでは混乱を避けるためにマズルカという言葉を用いる。

マズルカが様々な階層に広まり発展したのは、今からおよそ400年前、ポーランドの首都がクラコフからワルシャワに移った1596年頃からと言われている。もともとはマゾフシェ地方の農民達の間でもっぱら踊られてい

たが、やがてシュラフタ（士族）や貴族階級に伝わり、広く踊られるようになっていった。長い間、農民達の間で伝承されてきたために、マズルカは大変、土俗的な色合いの濃いものとなっている。ポーランドには、他にも性格が異なる舞曲が多数存在するが、ショパンは、それらの中から比較的ポピュラーな踊りであったマズール、クーヤヴィアク、オベーレクを作曲に取り入れ、マズルカと呼んで世に発表したため、これら３つの舞曲の形態がさらに広く一般的になっていった。

マズール、クーヤヴィアク、オベーレクは、いずれも、男女が大きな丸い輪を作り、さらに男女一組が対になってそれぞれ左右様々に旋回したり跳ねたりしながら踊る舞曲である。様々な踊りの形態によって、踵を踏みならし、口笛やかけ声をかけて踊る等、大変土俗的な色合いが濃くなっている。歌と踊りに合わせて、ドゥディ（またはコザ）と呼ばれる雄山羊の皮でできたバグパイプのような楽器や、ヴァイオリンとコントラバスに非常に良く似た弦楽器による、連続性のある低音伴奏音型（３和音の第３音を省略した５度音程の和音の連打）が繰り広げられる。

３つの舞曲に共通する特徴として、弱拍の２拍目と３拍目にアクセントがあらわれ、フレーズの最後では１拍目にアクセントが置かれることがあげられる。また、素朴な楽節を繰り返しながら即興的に発展していく曲が多い。即興性が高く、モチーフに対する様々な強弱による変化、テンポ・ルバートによるフレージング、様々な表情づけが特徴となっている。

ショパンにとってマズルカは、ポーランドの民族性の表現であるとともに、ショパン自身の魂の発露でもあった。ショパンは、出版社によって数が異なるが、およそ57曲のマズルカを作曲した。ショパンが生まれ育ったジェラゾヴァ・ヴォラでは、もの悲しい民謡の多いクーヤヴィアクが存在し、ショパンは母親ユスティナが歌う民謡を子守唄代わりに聞いて育った。ショパン中期の最高傑作と言われている「マズルカ嬰ト短調 Op.33-1」「マズルカ ロ短調 Op.33-4」は、このクーヤヴィアクで書かれている。また、14歳の夏に両親とポーランド国内旅行で訪れたシャファルニアやプウォツ

クなどでの経験は、若いショパンの胸を踊らせた。それらの地方に伝わる農民達の結婚式や民族音楽を用いる儀式や祭りに接して、大変興味を持ち「マズルカ変イ長調 Op.7-4」を作曲したと言われている。この時期のショパンの作品の中に、マズルカやポロネーズといった民族色豊な作品が多く残されているのは、幼少から多感な少年時代にかけて、民族音楽の影響を多く受けていたことの現れである。

あらためてショパンが受けた民族音楽の主な影響を整理すると、マズール、クーヤヴィアク、オベーレクといった３つ舞曲を上手く組み合わせて彼独自のスタイル、マズルカとして表現したこと、ドウディなどの民俗色豊かな楽器で演奏されていた低音伴奏音型などの奏法を意識的に作品の中に取り入れたこと、旋律にリディア旋法などの教会旋法を用いることによって民族的な響きと鳥の鳴く声等の自然を作品の中に取り込む工夫をしたこと等があげられる。

ショパンの作風の特徴としてあげられる、和声の平行進行や空虚５度（３和音の第３音を省略した形の５度音程）の使用、さらに、ショパン作品における独特な表現である“ショパンのハーモニー”、すなわち、属７の和音の中で第５音の代わりに第６音を経過音としてもつ特徴的な和音にも、民族的な響きが感じられる。

ショパンは、ピアノの楽器の構造と特質を知りつくしており、ショパン独自の奏法を見いだし、民族音楽のエッセンスを作品に盛り込んだ。こうして、ロマン派の代表的な作曲家と言われるとともに、国を離れていても祖国ポーランドの人々を励ますことができたのである。

マズルカを想うショパンの心情は、祖国やそこに生きる人々、父母、姉妹を慕う郷愁という言葉がふさわしい。20歳でポーランドを後にし、ウィーン、パリで過ごした亡命生活の間、マズルカを日記のように書き綴った。ポーランドの空気や空、森の色すべてが、ショパンのマズルカには凝縮されている。失意に終わったウィーン時代の後、パリで華やかなサロンデビューを果たしたが、そこで生活している間もずっとショパンの本当の心

の支えであり、よりどころとなっていたのである。

世界で最も権威のあるショパン国際ピアノコンクールでは、必ず課題曲にマズルカが取り上げられる。マズルカの演奏が、世界的に活躍できるピアニストになれるか否かの分かれ道になるとも言える。特に、マズルカにおいて優れた演奏をした者だけに授与されるマズルカ賞が用意されていることは、マズルカの持つ意味の重大さを表している。

4．若き演奏家たちの競演

⑴ ショパン国際ピアノコンクール

５年に一度、ポーランドのワルシャワで行われるショパン国際ピアノコンクールは、ピアノのコンクールの中では最も有名なコンクールである。第１回は1927年に行われ、2010年が第16回になる。現在では、ショパンの命日である10月17日の前後３週間にわたって開催される。

ショパン国際ピアノコンクールは、ワルシャワ・ショパン音楽院教授であるイェジ・ジュラヴレフが、オールショパンプログラムのピアノコンクールを発案し、それが具体化したものと言われている。アイディアは1925年頃に生まれた。時代は第１次世界大戦後にあたり、教授にとっては、物の見方や考え方がとても現実的になったと感じられた。ショパンの音楽はロマンティックで感傷的なので、音楽教育にとり入れるべきではないという意見が出るほどであった。また、当時の音楽家志望の若い学生は、無目的、無気力、無感動だったそうで、教授は、このような状況に我慢がならず、ショパンの音楽を理解しない風潮への打開策としてショパンの名を冠したコンクールを考えた。教授は、このコンクールが単なるピアノのコンクールにとどまらず、若い才能が世界に羽ばたくチャンスにしたいと考え、賞金やその後の演奏会の機会を用意した。また、コンクールにより、一定の水準を満たしたピアニストによりショパンの音楽が世界に広がることは、ショパンの音楽にとっても望ましいことと考えられた。

ショパン国際ピアノコンクールのこれまでの流れを、社会背景を視野に入れながら整理する。

①黎明期：第１～３回（1927～37）

第１回から第３回までは、第二次世界大戦前のコンクールの黎明期と言える。１位はすべて旧ソ連のピアニストが占めた。

②復興期：第４～５回（1949～1955）

第二次世界大戦が始まり、ナチス占領軍がポーランド人の愛国心高揚を恐れてショパンの音楽を演奏することを禁止したため、コンクールは中断された。戦後、ワルシャワの街が復興する中、ショパン没後100年にあたる1949年に、ようやくコンクールが再開された。第５回の１位はアダム・ハラシェヴィチ（ポーランド）、２位はウラディーミル・アシュケナージ（ソ連）である。

③発展期：第６～11回（1960～1985）

1960年はショパン生誕150周年であったため、世界大戦の傷跡がようやく癒えてきた各国で、ショパンを記念する催しごとが相次いだ。世界10カ国でポーランドのピアニストによるショパン演奏会とショパン展が開催され、完成したばかりの楽譜、パデレフスキ版ショパン作品全集やこの楽譜で録音されたレコード全集が発売された。ポーランド科学アカデミーの総裁、タデウシュ・コタルビンスキ教授は、「ショパンは我々だけの音楽ではなく、あなた方の音楽でもあります。」と高らかに宣言した。こうした時代背景の中で開幕した第６回で優勝したのは、これまでのポーランドやソ連ではなく、イタリアのマウリツィオ・ポリーニであった。第７回の１位はマルタ・アルゲリッチ（アルゼンチン）、４位は中村紘子（日本）、第８回の２位は内田光子（日本）、第９回の１位はクリスチャン・ツィメルマン（ポーランド）、第10回の１位はタイソン・ダン（ヴェトナム）、第11回の１位はスタニスラフ・ブーニン（ソ連）、４位は小山実稚恵（日本）である。

④混迷期：第12～13回（1990～1995）

第12回はコンクール史上初の１位該当者なし、マズルカ賞、コンチェルト賞なしという結果であった。３位に横山幸雄（日本）が入った。第13回も１位該当者なし。

⑤現在まで：第14～16回（2000～2010）

第14回は15年ぶりに１位が登場した（ユンディ・リー：中国）。第15回は30年ぶりにポーランド人ラファウ・ブレハッチが１位となり、ポーランドにとっても大変活気づいたコンクールとなった。直近の第16回の入賞者は、ロシア、東欧中心の顔ぶれとなり、初期のころを思わせるものとなった。

近年、日本をはじめとして東洋人の参加者が多くなっている。審査員も第８回以降、著名な日本人ピアニストが呼ばれている。日本人の弾くショパンが、テクニックの面でも音楽性の面においても、ショパン作品を愛する気持ちが認められてきた喜ばしいことと受け止められるが、実際のところ、未だに優勝者を出していないという現実もある。

⑵ コンクールの憂鬱

ショパン国際ピアノコンクールについて、商業化による弊害が指摘され、コンクールのコンセプトが問われている。商業化については、利益（商業価値）が重視されるようになり、本来ならば認められて世に出るはずの才能ある人が出られないでいる（あるいは、それほど才能のない人が認められる）という話がある。また、コンクールそのものに内在する問題点としては、ショパン作品をショパンの作品として上手く弾く“ショパン弾き”を選ぶのか、それともショパンの作品を通じて個性的な才能あるピアニストを選ぶのか、ということがあげられる。

第10回の時に起きた「ポゴレリッチ事件」は、コンクールの問題点が先鋭的に表れた事例である。ポゴレリッチの演奏が伝統的なショパン演奏とは異なり、あまりに斬新な演奏であったため、まず、ポゴレリッチが１次予選を通ったことで審査員のルイス・ケントナーが審査を辞退した。する

と、今度は第３次予選にポゴレリッチが落選したことを不服として、審査員のマルタ・アルゲリッチが「彼は、天才よ」と言って審査を辞退してしまった。コンクールでは、“ポゴレリッチは才能あるピアニストであるがショパン弾きではない”と評価されたのだ。入賞はしなかったものの、コンクール後のワルシャワでのリサイタルは大喝采を浴び続け、その後の世界での活躍は入賞者をはるかにしのぐものとされている。

⑶ ショパン弾きとしての矜持

ショパンの考える“音による思想の表現”に始まり、ピアノ曲を通じて作曲された当時の社会背景や思想を後世に伝えていくことは、大変哲学的な意味合いもあり、難しくも重要なことだと考える。しかし、現代社会にあっては、音楽には、愛国心の鼓舞や信念の強化、生きる勇気を与える力といった側面にとどまらず、自分探しや癒しの効果なども求められている。こうした時代においてピアニストの果たす役割は、ショパンの音楽、その本来の意図をできるだけ優しく指し示すと同時に、解釈においてあらゆるものを受け入れる可能性を示すことであると思われる。ショパンのピアノ曲には、作曲家自身の意図、解釈に加えて、日本人や東洋人、欧米人など、それぞれの背負った歴史、文化、社会からの様々な解釈が投影される。ショパン弾きと言われる人達も、ショパンの高度な模倣ではなく、自分の持つピアノの才能を最大限発揮して自己のアイデンティティを反映した演奏活動を展開していってよいのだと考えている。

ショパンの作品には、当時のポーランドの社会的状況やショパンの歩んだ人生が色濃く反映されている。作曲された背景やモチーフを知ることにより、楽曲に対する関心や愛着が深まり、より深い感動が得られる。本稿を通じて、ショパンのピアノ曲を愛する人が少しでも増えれば、それに勝る喜びはない。

〈参考文献〉

W. アトウッド著　横溝亮一訳「ピアニスト・ショパン」上・下、東京音楽社、1991年
F. E. カービー著　千蔵八郎訳「鍵盤音楽の歴史」全音楽譜出版社、1979年
A. グルジンスキ著　小林倫子・松本照男共訳「ショパン」ショパン社、2006年
A. ヘドレイ編　小松雄一郎訳「ショパンの手紙」白水社、2003年
ホルクスマン著　野村千枝訳「ショパンの遺産」音楽之友社、1957年
佐藤泰一「ショパン・コンクール」春秋社、2005年
田村　進「ポーランド音楽史」雄山閣出版、1980年
遠山一行「ショパン　カラー版作曲家の生涯」新潮社、1988年
仲道郁代編著「ショパン　鍵盤のミステリー」ナツメ社、2010年
東　貴良「ショパン パリコレクション」ショパン社、2002年
松本由美子「ショパンの４つのマズルカOp.33とその背景について」白鷗大学教育学部論集 第２巻第２号、2008年
Zygmunt　Mycielski, “Chopin Studies”, Frederick Chopin Society, Warsaw, 1990
Tadeusz A. Zielinski, “Chopin Zycie I droga tworcza”, Polskie Wydawnictwo Muzyczne, 1993